29-1062

満生疾患に関する服薬コンプライアンスのレビュー

○小林 有佳[1], 福田 敬[1], 津谷 喜一郎[1] ([1]東京大学大学院薬学系研究科医薬経済学)

【目的】適切な薬物療法が実施されるには、医師の処方通りに患者が服薬することが重要である。いかに優れた医薬品であっても、患者が適切に使用しなければ、十分な効果が得られないばかりか、有害事象を生じる可能性があり、また追加的な費用が必要になる場合がある。しかし、日本において医薬品の服薬コンプライアンスに関する研究は欧米に比較して少なく、服薬コンプライアンスの定義も曖昧である。服薬不履行（ノンコンプライアンス）によって、有効性、安全性、経済性が低下することを考えると、患者の服薬コンプライアンスを把握することは意義がある。本研究では、長期的に服薬を行う必要のある慢性疾患（特に生活習慣病）に焦点をあて、日本の慢性疾患の服薬実態に関する文献を調査し、服薬実態を把握すると共にその問題点について考察した。
【方法】文献検索には、医中誌 Web(1983-2004)を使用し、対象文献を抽出した。また、そのリファレンスに掲載されている文献も対象文献とした。調査項目は、調査法、調査規模、服薬コンプライアンスの定義、服薬コンプライアンスの実態、年齢別・疾患別・服薬用法・用量別における服薬コンプライアンスの実態、経済性の評価、治療効果、服薬コンプライアンスの具体的改善策の 8 種である。
【結果・考察】服薬コンプライアンスに対する定義、調査方法が各々の文献により異なり、服薬不履行率（ノンコンプライアンス率）は全体として 16%-68%とバラツキがあった。今後、服薬不履行によって引き起こされる治療効果の低下、有害事象の発生などを考慮し、主たる疾患の服薬不履行率をそれぞれ推計すべきである。また、実態を把握するためのより妥当な方法論を用い、有効性、安全性、経済性を評価するための prospective な研究を行う必要があると考える。